

kitahara
北原遺跡

ふくおかけん や め し いわさき きたはら
福岡県八女市岩崎字北原所在遺跡の調査報告書

八女市文化財調査報告書 第83集

2008

八女市教育委員会

序

八女市の西端付近に位置している吉田・岩崎地区を中心とした周辺地域には数多くの弥生時代、及び、古墳時代の遺跡が所在しています。

今回、調査が行われました岩崎地区における文化財調査の歴史は比較的長く、大正時代に発掘調査が行われた岩崎遺跡がその端緒となっています。この弥生遺跡からは多数の竪穴式住居や石棺墓が検出され、たくさんの土器や石包丁、石斧と共に、おびただしい量の炭化米が出土しました。弥生時代の米が多量に見つかる事は大変珍しく、発見当時は、大きな話題となりました。この発見の後も、先人達により遺跡の全体像を把握すべく忍耐強い調査・分析が行われ、現在では、岩崎集落を中心とした台地のほぼ全域に遺跡が広がっている事がわかってまいりました。

近年、携帯電話を主軸とした通信機器の目覚ましい発達により、市内の平野部だけではなく比較的ゆったりとした時間の流れの中にあった当地区においても通信用電波基地局の建設が急ピッチで進むようになりました。

貴重な文化遺産である遺跡を、地権者の方々の努力と御理解のみで現状を保存してゆくのは非常に困難な事であり、八女市教育委員会では現在、事業地における事前発掘調査を行い、遺跡を記録として保存し、後世に伝えていく発掘調査事業を継続して行っています。

今回、発掘調査を実施した北原遺跡は、岩崎遺跡群と呼ばれる周知の埋蔵文化財包蔵地であり、今回の調査地もその遺跡群の北辺部に位置しておりましたので、事業者の御協力のもと、発掘調査を行わせて頂きました。

詳細な経過や調査結果の内容につきましては本文の項に譲りますが、予想以上の成果がありました。その成果を一冊の冊子としてまとめるにあたり、本報告書が当該遺跡、そして八女市にある全ての文化財に対する、愛護の心を育む一助となれば幸甚に存じます。

最後になりましたが、本発掘調査に際し格段のご協力とご理解をいただきました株式会社エヌ・ティ・ティ・ドコモ九州 代表取締役社長 井上 登 様をはじめ、北洋建設の関係者各位、そして地元吉田・岩崎の皆様には並々ならぬご理解と心からの応援を戴きました。

ここに深く御礼を申し上げるとともに、今後の文化財行政につきまして、これまで以上の暖かいご声援を賜りますようお願い申し上げます。

平成20年3月31日

八女市教育委員会

教育長 中島清志

例 言

- 1 本書は八女市教育委員会が、株式会社エヌ・ティ・ティ・ドコモ九州 代表取締役社長 井上 登より委託を受けて八女市教育委員会が実施した八女市岩崎字北原に所在する弥生時代後期から古墳時代初頭を中心とした北原遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査は八女市教育委員会が主体となり実施した。
発掘現場における調査・整理作業及び報告書作成は、平成19年度に一括して行った。
- 3 発掘調査で検出した各遺構は、その種類毎に記号を付し、竪穴式住居、掘立柱建物をSB、土塋をSK、ピットをSPと表記した。
- 4 本書に使用した測量図の作成は国土地理院の国土座標（世界標準系）を基準とし、大塚を中心に参加者で分担して行った。各種測量図の浄書、及び、出土遺物の実測図作成・浄書は岩戸山歴史資料館において行った。
- 5 本書に使用した写真は大塚が撮影した。
- 6 本書使用の標高は海拔高であり、方位は全て磁北である。本地域における真北との偏差は約 $6^{\circ}10'$ である。
- 7 本書の執筆、及び、編集は大塚が担当した。
- 8 本書に関する調査記録、及び、出土遺物は、現在八女市の岩戸山歴史資料館において保管、収蔵している。

本文目次

I	調査の経過	1
II	遺跡の立地と歴史的環境	3
III	調査の内容	7
1.	調査経過	7
2.	検出遺構	9
a)	竪穴式住居	9
b)	掘立柱建物	11
c)	土塋	11
IV	出土遺物	12
V	まとめ	18

挿図目次

第 1 図	北原遺跡位置図と周辺の遺跡 [1/25, 000]	4
第 2 図	北原遺跡調査位置図 [1/2, 500]	6
第 3 図	北原遺跡調査 遺構配置図 [1/100]	7
第 4 図	SB-01・02 実測図 [1/40]	8
第 5 図	SB-02 Aピット 土層断面図 [1/20]	9
第 6 図	SB-03 実測図 [1/40]	10
第 7 図	SB-04 実測図 [1/40]	10
第 8 図	SB-05 実測図 [1/40]	11
第 9 図	SB-06 実測図 [1/40]	11
第 10 図	SK-01 実測図 [1/30]	12
第 11 図	SK-02 実測図 [1/40]	12
第 12 図	SK-03 実測図 [1/30]	12
第 13 図	SB-01 上層出土土器 1 実測図 [1/3]	13
第 14 図	SB-01 上層出土土器 2 実測図 [1/3]	14
第 15 図	SB-01 下層出土土器 実測図 [1/3]	15
第 16 図	SB-02 出土土器 実測図 [1/3]	15
第 17 図	SB-03 出土土器 実測図 [1/3]	16
第 18 図	SB-05 出土土器 実測図 [1/3]	17
第 19 図	SK-03 出土土器 実測図 [1/3]	17
第 20 図	SB-01・03 出土石製品 実測図 [1/3]	17

図 版 目 次

PL 1~PL 9	北原遺跡 現地調査状況
PL 10~PL 13	北原遺跡 出土遺物

表 目 次

第1表	北原遺跡 出土土器観察表	19・20
第2表	北原遺跡 出土石器観察表	20

I 調査の経過

1 調査に至る経過

八女市の北西部に位置する八女台地（以下、八女丘陵）上は、市内でも有数の古墳密集度が高い地域として内外より注目を浴びる場所であり、現在でも新発見が相次ぐほど高密度な情報を内在している。

近年、丘陵上を含む周辺地域においても住宅の建築、農地開発などの事業が僅かながら進んできており、これらを原因とした発掘調査が行われた結果、徐々にではあるが、当地域の古代における実態がわずかながら把握出来るようにはなった。

しかしながら、開発の波は結果的に古代の痕跡を狭めて行く事となり、今後も当該地域に対し注意を払う必要があるであろう。

今回の調査の発端は、エヌ・ティ・ティ・ドコモ九州が九州内に展開させている携帯電話用の電波基地局建設の為である。

平成18年11月13日付けにおいてエヌ・ティ・ティ・ドコモ九州より電波基地局建設工事に伴う埋蔵文化財包蔵地の確認調査の依頼（18八社文第205号）が提出された。

確認調査の結果、当該地において埋蔵文化財の包蔵が認められた為、八女市教育委員会では事業者あて埋蔵文化財包蔵地の確認結果について回答（18八社文第205号—1号）を行い、今後の対応について事業者と協議を行った。事業者側には工事予定対象地には多数の埋蔵文化財が存在している旨を伝え、その保存対策等について随時協議する事となった。

上記に基づき平成18年12月14日付けにより、事業者より電波基地局建設工事に伴う埋蔵文化財発掘の届出（18八社文第229号）が提出された。

その結果、八女市教育委員会が予定地区の発掘調査を行い遺跡の記録保存を行いたい旨、事業者に伝えた。

その後、双方の協議過程において平成19年4月16日付けで埋蔵文化財発掘・整理調査に係る委託契約書を交わし、平成19年4月から同年5月31日まで現地において発掘調査を行った。

また、同年度において、八女市教育委員会が整理調査事業主体者となり整理事業にも着手した。

発掘・整理調査における体制は以下の通りである。

2 調査体制

〔工事業主体〕

株式会社エヌ・ティ・ティ・ドコモ九州

代表取締役社長 井上 登

〔調査主体〕

八女市教育委員会

〔平成18年度〕（平成18年9月まで）

教 育 長	中島 清志
生涯学習課長	大津山 篤（兼学校教育課長）
同課長補佐	古庄 龍美
文化財係長	赤崎 敏男
同 係員	中川寿賀子
同 係員	大塚 恵治

【平成18年度】（平成18年10月から。旧上陽町との合併による）

教 育 長	中島 清志
社会教育課長	飯田せつ子
同課長補佐	松崎 保元
文化財係長	赤崎 敏男
同 係員	中川寿賀子
同 係員	大塚 恵治

【平成19年度】

教 育 長	中島 清志
社会教育課長	飯田せつ子
同課長補佐	松崎 保元
文化財係長	赤崎 敏男
同 係員	中川寿賀子
同 係員	大塚 恵治（発掘・整理調査担当）
同 嘱託	立石 真二（平成19年10月から平成20年3月31日まで）

調査作業（五十音順）

石井 勇、月足まつみ、鶴賀久博

整理作業（五十音順）

佐田良子、野間口靖子

なお、発掘調査にあたり、株式会社エヌ・ティ・ティ・ドコモ九州 代表取締役社長 井上 登 様、及び、工事担当の北洋建設 様からは調査中に多大なる御援助・御協力を賜りました。また、北原遺跡周辺に御在住の方々、そして地域の住民の方々には多大なるご配慮とご理解、そして遺跡に関する御教示を賜り、本調査に対し暖かいご声援を戴きました。紙面上で恐縮とは存じますが、御礼申し上げます。

また、以下の方々や諸機関には発掘調査、及び、整理調査において並々ならぬ御指導・御教示・御協力をお受けいたしました。末筆ながら記して感謝申し上げます。

（順不同、敬称略）

佐々木四十臣（福岡県文化財保護指導委員）尾崎源太郎（広川町教育委員会）

Ⅱ 遺跡の立地と歴史的環境

【地理的環境】

八女市は福岡県の南部に位置し、西に筑後市、東に黒木町、北に広川町、南に立花町・みやま市と2市3町と境を接し、主に農業を基幹産業としている。その立地は、耳縄山地南緩斜面より西方に延びる八女台地(八女丘陵)と、福岡・熊本両県を区する筑肥山地により「コ」の字状に囲まれ、釈迦岳山地に源を発し、黒木盆地を経て平野部を西流する矢部川によって形成された扇状地上にある。

北原遺跡は八女市の北西部に位置する岩崎地区にある。八女丘陵のやや東寄り付近に位置し、岩戸山古墳から南南西方向、直線距離に直して約550mに位置している。鶴見山古墳や善蔵塚古墳、岩戸山古墳などの大型前方後円墳が所在する近辺の丘陵部は非常に狭小であり、一部では丘陵北側直下を西流する広川の侵食作用で一部絶壁状となり断面形が馬の背状にやや鋭角気味となっているのに対し、岩戸山古墳以西では逆に少しづつ標高を下げながら、且つ、急激にその幅を増し広大な台地となり、県道広川唐尾線付近をもって最大幅となっている。台地平坦面が広い為、周囲への眺望はあまり良好ではなく、北・西方面では台地高位が視認出来るのみである。南・東方面では台地端部が比較的近い為、広く八女市内を見渡す事が出来る。特に遺跡東側⁽³¹⁾は水田面との比高差15mの断崖が存在し、天然の要害となっている事が分かる。

交通事情に目を移すと、当地は九州縦貫自動車道、国道3号線、国道442号線によりトライアングル状に囲まれた中心部付近にあり、現在の交通事情からすれば、若干不便と言わざるを得ない。しかし、水田や茶畑、果樹園などに囲まれた閑静な地域となっており、都会の喧噪とは緑豊かな住環境としてはこの上ない立地となっている。

【歴史的環境】

北原遺跡は八女市岩崎字北原に所在する弥生時代後期から古墳時代初頭を中心とした集落遺跡である。総数300基以上の古墳が内在し、古代九州の大豪族「筑紫君」の奥津城と言われる八女古墳群に近接する位置にあり、遺跡の北北東には北部九州最大の前方後円墳である岩戸山古墳が堂々と鎮座している。

当該遺跡周辺は、以前から各種調査等の成果により、弥生時代遺跡の一大密集地区であることが先学により指摘されていた。ここでは、北原遺跡を内包する岩崎遺跡群と非常に密接な関係を持っていると考えられる室岡遺跡群も含め、これまでに発掘等調査を受けた周辺の遺跡などを見渡し、八女市南・西部における弥生時代、及び、古墳時代の遺跡についての概略を記述する。

現在、八女市内における弥生時代最古段階の遺跡は亀ノ甲遺跡と宿町遺跡、立野大坪遺跡が挙げられる。3遺跡とも弥生時代前期後半頃の環濠遺跡であるが、宿町遺跡(単環濠)と立野大坪遺跡(二重環濠)は直径が100m前後と比較的小規模な上に貯蔵穴専用環濠と考えられるのに対し、亀ノ甲遺跡(単環濠?)は推定直径200mの規模を有し、未確認ながら環濠集落的な内容を十分にもつ遺跡である。市内では未だ当該期にかかる本格的な稲作遺跡は発見されていないが、稲作と環濠遺跡はセット関係になることが多く、前期後半以前には稲作が定着していたものと考えられる。

中期に入ると、これまで見られた様相とは異なった状況が展開する。中期前半から中頃にかけては竈穴住居が散発的にしか存在しないようになり、環濠のような大規模な土木工事を伴う遺構は全く確認出来ないようになる。ところが中期後半頃になると、六反田遺跡のように大規模な集落域と墳墓域がセットになって出現するなど、再び大規模な土木工事を伴うべき大集落形成の萌芽が見られるようになる。また、前述した立野大坪遺跡等から鉄器が出土するようになるなど、その普及と相前後し、変化の著しい時代様相の到来が看取できる。

後期に入ると、各地で大規模な集落が形成されるようになる。室岡地区では野口遺跡や道添遺跡、室岡工業団地内遺跡等があり、後二者からは鉄器や砥石が数点出土している。矢部川に面した南部地区では、現在



0 500 1000 1500 2000m

第1図 北原遺跡位置図と周辺の遺跡 [1/25,000]

- | | | | |
|-------------|--------------|-----------|-----------|
| 1.北原遺跡 | 2.西山ノ上遺跡1・2次 | 3.山ノ上遺跡 | 4.亀ノ甲遺跡 |
| 5.北小路遺跡 | 6.岡山小学校校底遺跡 | 7.樋の口遺跡2次 | 8.立野・大坪遺跡 |
| 9.篠原遺跡 | 10.中里遺跡 | 11.野田遺跡 | 12.深田遺跡 |
| 13.京田遺跡1・2次 | | | |

のところ大規模集落は発見されていないが、アモメ遺跡では非常に規模の大きな貯蔵穴群域があり、近くには墳墓域も存在することから、近接した区域に大規模な集落が存在するものと思われる。また、同地区内に所在する茶ノ木本遺跡の甕棺墓群からは内行花文鏡、深樋式銅剣、鉄戈が出土しており、これらの事象は在地有力者の台頭とともに大規模集落同士の統合が進んでいることを示唆している。

古墳時代に入ると、八女丘陵上では4世紀後半頃から方形周溝墓や小円墳が造られるようになる。市内においては辻の西遺跡1・2次調査や立山山古墳群が挙げられ、比較的小さな墓域の中で造墓活動を行っている事がわかる。

平野部に目を転じると、八女丘陵南部の扇状地上で西原遺跡や熊野遺跡（1次調査）等の弥生時代後半期に該当する甕棺墓群、石棺墓群、土墳墓群が展開し、その直後に畿内系の方形周溝墓が在地に楔を打ち込むかのように群形成し展開している。また、平田・六反田遺跡では「居館跡」と思われる断面三角形～逆台形の方形周溝の一部が発見されている。全体形の30%程の検出であり、溝内側の様子の全てを伺い知る事は出来ないが、全国に発見例が知られる古墳時代前・中期に位置付けられる「豪族居館」の一例となるかも知れない。

八女古墳群中の首長墓系列の初現は広川町・筑後市に跨がる石人山古墳（墳丘長108m）である。羨道部が短く玄門間口が狭い初期横穴式石室を内部主体に持ち、石室内には妻入の家形石棺を古墳主軸線上に安置する。棺蓋の屋根外面及び妻側には直文が浮き彫りされている。石室や石棺の形態、出土した初期須恵器から古墳築造時期は5世紀前半～中頃に比定され、後円部と前方部の境には、被葬者を守護するかのよう前方部を向いた武装石人が樹立している。石人山古墳が筑紫君磐井の祖父の墓だとも言われている所以である。

5世紀後半になると、八女古墳群中から大型前方後円墳が見られなくなるが、久留米市南部地区の高良内・上津町周辺に浦山古墳（墳丘長約88m 帆立貝形）や石櫃山古墳（墳丘長100～115m 前方後円墳）等の大型前方後円墳が出現する。同じ頃、丘陵上では瑞王寺古墳（直径26m 円墳）、欠塚古墳（墳丘長45m 前方後円墳）、本6号墳（直径41m 円墳）、釘崎2号古墳（墳丘長47m 前方後円墳）、丸山古墳（墳丘長55m 前方後円墳）等の中規模古墳が次々と築造される。

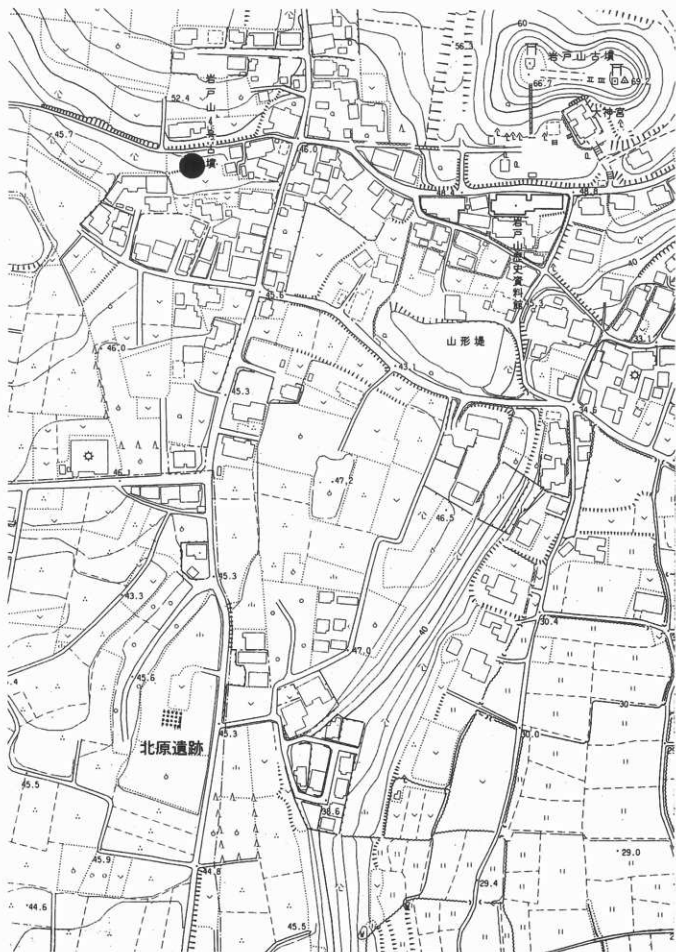
6世紀前半～中頃になると、北部九州最大の規模を誇る岩戸山古墳が築造され、「筑紫君」は絶頂期を迎える。続く乗場、善蔵塚、鶴見山の3基の大型前方後円墳は殆ど時間的な空白を置く事なく築造されており、このような状況は、火君の奥津城である熊本県竜北町所在の野津古墳群にも見られ、八女古墳群との関連が興味深い。

6世紀後半になると八女丘陵上に直径10数m程の小円墳が爆発的に発生する。一般的に後期群集墳と呼ばれるものであるが、規模が小さい上に古墳を築造する墓域が厳格に定められている為、一定地域に密集し一大古墳群を形成する傾向にある。しかし、これら群集墳は直径30m規模の円墳を盟主墳として伴う例はあるが、釘崎古墳群を除けば前方後円墳を伴う古墳群は八女古墳群には見当たらない。

6世紀末～7世紀初頭に至ると前方後円墳は完全に姿を消し、替わって八女古墳群東端付近に位置する童男山古墳（県指定史跡）や岩戸山古墳の西方に位置する岩戸山4号古墳（下茶屋古墳）など、巨石を用いた大型の石室を内部主体に持つ円墳が築造されるようになる。しかし、7世紀初頭以後これらの古墳に後続する大型円墳は全く見当たらず、また、6世紀中頃～後半頃に築造され始めた後期群集墳もこれと歩調を合わせるかのように突如として姿を消すようになる。

補 註

- (1) 本遺跡から北西に約400mの地点において平成20年1月に埋蔵文化財確認調査（試掘調査）が行われ、断崖部分の上端面に環濠らしき溝が断崖と平行に走っている事が確認された。この溝が環濠の一部である事が確認されれば、当地区に北原遺跡を含めた岩崎遺跡群を取り囲む非常に大規模な環濠集落が形成されている可能性も出てくる。



第2図 北原遺跡位置図 (1/25,000)

Ⅲ 調査の内容

1. 調査経過

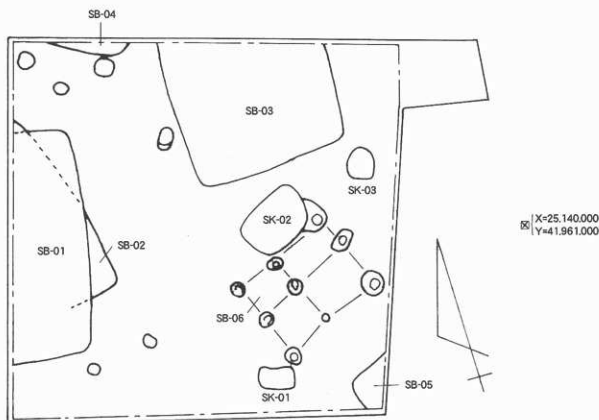
今回の調査は、当地にエヌ・ティ・ティ・ドコモ九州が九州内に展開させている携帯電話用の電波基地局建設を行う為であった。

高さ40mとなる巨大な鉄塔を永く機能させる為、深い基礎工事や地盤改良等を行い、大きく平坦面を造成する必要があった。

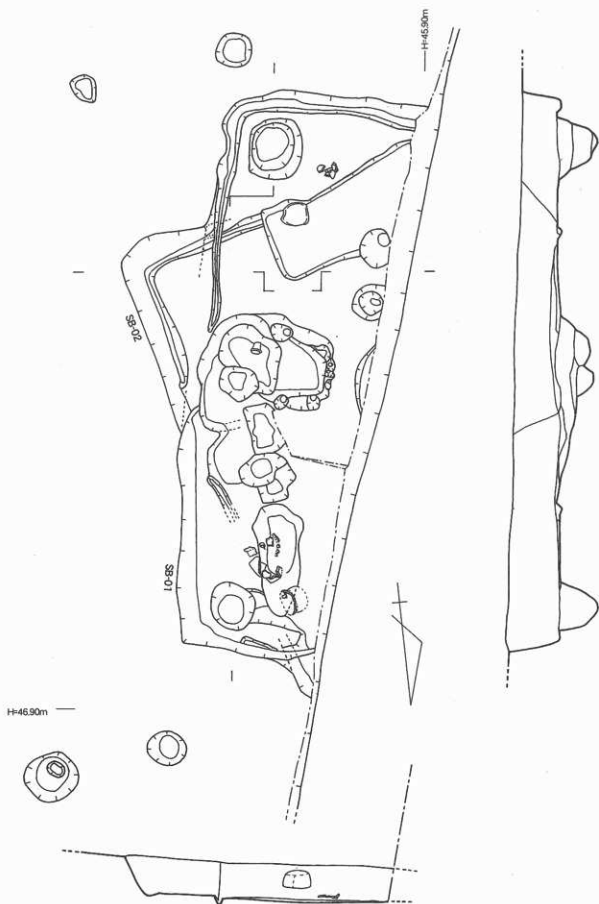
事業主体者との協議の結果、掘削に伴う鉄塔建設部分について発掘調査を実施する事になり、平成19年4月から同年5月まで現地において発掘調査を行った。

調査の結果、弥生時代後期から古墳時代初頭の竪穴住居を中心とした比較的密集度の高い遺構群が検出され、生活域の一部である事が判明した。また、遺跡は周辺部にも大きく広がっている事が容易に予想出来、時系列的にも本遺跡を含めた岩崎遺跡群の重要性を最確認する事が出来た。

以下、各遺構別に詳細を記述する。



第3図 北原遺跡 遺構配置図 [1/100]



第4图 SB-01·02 实测图 [1/40]

2. 検出遺構

(a) 竪穴式住居 (SB)

1号竪穴式住居 (SB-01) [第4図 PL3~7]

調査区南西端で検出した竪穴式住居である。SB-02を切り込む。平面形は未検出部分が多く不明。検出長辺の方位をN-12°-Eにとり、規模は検出長6.0m×2.2m、深さ0.4mを測る。主柱穴は不明。東辺の中央部に屋内土壌を付設しており、土壌の南北両端部には15cm~20cmの小ピットが各1穴穿たれている。この設置の在り方は、筑後地方における古墳時代初頭前後の伝統的なものであり、旧八女郡内では見聞する事が多い。検出された3壁面には壁溝が遺存していたが、全周はせず、北東側の一部に空間が生じている。住居出入口の可能性もあり、注意を要する。また、北東、及び、南東隅には直径50cm~70cm程の貯蔵穴状のピットが穿たれていたが、貯蔵穴と判断する材料は検出出来なかった。住居中央部と考えられるエリアには幅3m程の叩き締めと考えられる硬化面が敷設されており、この部分が住居使用時の主たる生活区域と思われる。

出土遺物には甕・壺形、鉢形、高坏、石包丁等があり、弥生時代後期後半~終末を中心とした時期を營造時期として比定した。



第5図 SB-02 Aピット
土層断面図 [1/100]

2号竪穴式住居 (SB-02) [第4・5図 PL3・5・6]

調査区南西端で検出した竪穴式住居である。SB-01に切られる。平面形は未検出部分が多く不明。検出長辺の方位をN-17°-Wにとり、規模は検出長5.15m×3.35m、深さ0.4mを測る。主柱穴は不明。東辺の中央部に屋内土壌を付設しており、土壌の南北両端部には前述したSB-01と同様の直径40cm~50cmの小ピットが各1穴穿たれているが、やや規模が大きい。検出された2壁面には壁溝が遺存していたが、全周していない。SB-01に切られている事もあり、壁溝の遺存状況は悪く住居出入口等の検討は困難である。

出土遺物は全て細片であり時期比定は困難であるが、SB-01の出土遺物と比較しても特徴的な大きな変化が見られない事から、SB-01营造の直前に廃絶した住居と考えられる。

3号竪穴式住居 (SB-03) [第6図 PL7]

調査区北端で検出した竪穴式住居である。平面形は長方形プランを呈している。検出長辺の方位をN-6°-Eにとり、ほぼ真北を向く。規模は検出長4.2m×4.0m、深さ0.25mを測る。2本柱と思われる、建て替えに伴うものと考えられる切り合いのある深さ0.74mの南側主柱穴を検出した。東辺の中央部に屋内土壌を付設しているが、SB-01・02で検出された土壌両端の小ピットは見られなかった。壁溝は見られなかった。南東隅に基盤削り出しのベッド状遺構が見られるが、形状・厚さも一定しない。

出土遺物には、壺・鉢・甕形、及び、砥石、ミニチュア土器がある。住居のスタイルや付帯施設の状況は、やや古い様相を呈しているが、SB-01との軸方向の近似や出土遺物の状況から考えると、营造時期はSB-01併行と考えられる。

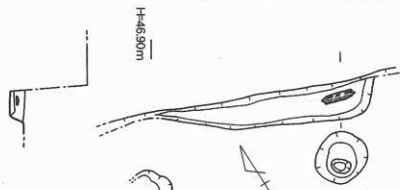
4号竪穴式住居 (SB-04) [第7図 PL7]

調査区北西端で検出した竪穴式住居である。平面形、及び、規模については未検出部分が多く不明であるが、検出規模は検出長2.45m×0.45m、深さ0.15mを測る。主柱穴は不明。東端のコーナー部分に35cm×8cmの炭化材が横たわっていた。

出土遺物は全て細片であり、図化出来なかった。



第6図 SB-03 実測図 [1/40]



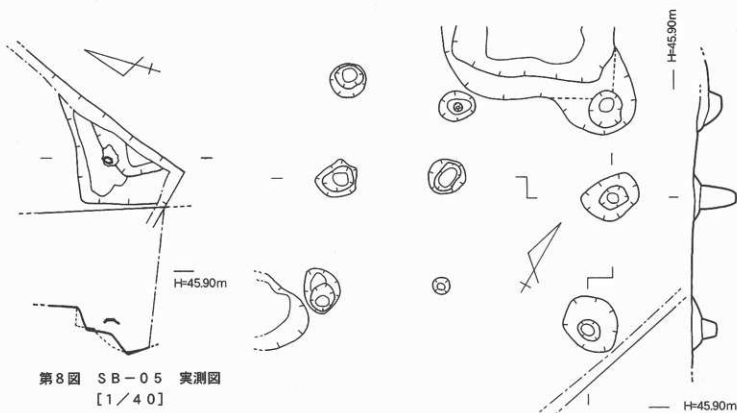
第7図 SB-04 実測図 [1/40]

5号竪穴式住居 (SB-05)

[第8図 PL8]

調査区南東端で検出した竪穴式住居である。平面形、及び、規模については未検出部分が多く不明であるが、検出規模は検出長1.2m×1.15m、深さ0.3m～0.5mを測る。

出土遺物は甕・壺形土器があった。



第8図 SB-05 実測図
[1/40]

(b) 掘立柱建物 (SB)

6号掘立柱建物
(SB-06)

[第9図 PL8]

調査区南東附近で検出した9本柱の掘立柱建物である。SK-02を切る。長軸方位を $N-59^{\circ}-E$ に取る2間×2間の総柱建物である。SB-02・05との方位的な類似はあるが、相互の建物配置が接近していることから、時期的には大きく異なると思われる。規模は芯心で $2.8m \times 2.4m$ 、床面積 $6.72m^2$ を測る。柱穴掘方プランは不整形円で、柱穴の規模や配置に若干ばらつきが見られ、安定感に欠ける感がある。柱穴掘方より僅かに土器が出土したが、細片の為図化していない。



第9図 SB-06 実測図 [1/40]

(c) 土壌 (SK)

1号土壌 (SK-01)

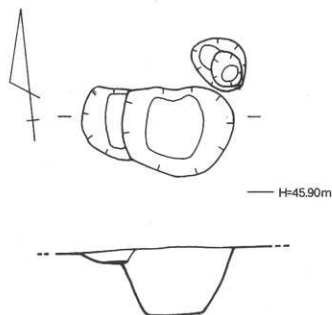
[第10図 PL8・9]

調査区南端附近で検出したやや不整形の隅丸長方形を呈する土壌である。長軸方位を $S-84^{\circ}-E$ に取り、ほぼ東西を向く。規模は $1.2m \times 0.7m$ 、深さ $0.55m$ を測る。断面形は逆台形を呈し、西端部に段落ちを付設する。この段は、土壌内へ入る際のステップとして用いられたものと考えられる。位置関係からSB-05の貯蔵穴と考えられるが、特定する材料を持たない。

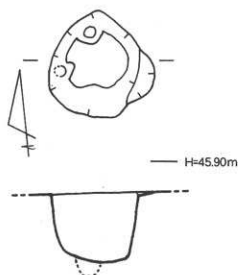
出土遺物は全て細片であり、図化出来なかった。

2号土壌 (SK-02) [第11図 PL9]

調査区中央附近で検出した隅丸長方形を呈する土壌であり、長軸方位を $N-58^{\circ}-E$ に取る。規模は $1.82m \times 1.25m$ 、深さ $0.85m$ を測る。断面形は逆台形を呈し、土壌床面は平滑である。床面には逆茂木等、人為的な所作は見られなかったが、箱形に近い断面形状や黒色の低粘性土が主体となり埋土となっ



第10図 SK-01 実測図 [1/30]



第12図 SK-03 実測図 [1/30]

ていた事から、落とし穴状遺構と判断した。位置関係から住居群との時期的隔絶があると思われ、弥生時代後期以前の所産であると考えたい。

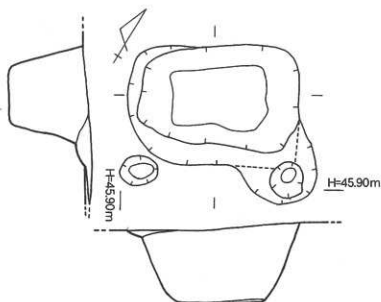
出土遺物はなかった。

3号土坑 (SK-03) [第12図 P L9]

調査区北東端附近で検出した円形を呈する土坑である。直径0.85m、深さ0.55mを測る。床面北西側に小穴が2穴穿たれている。昇降用の施設の痕跡とも考えられるが、特定する材料を持たない。

位置関係からSK-01同様、SB-03に付帯した貯蔵穴とも考えられる。

出土遺物は甕・壺形土器等があった。



第11図 SK-02 実測図 [1/40]

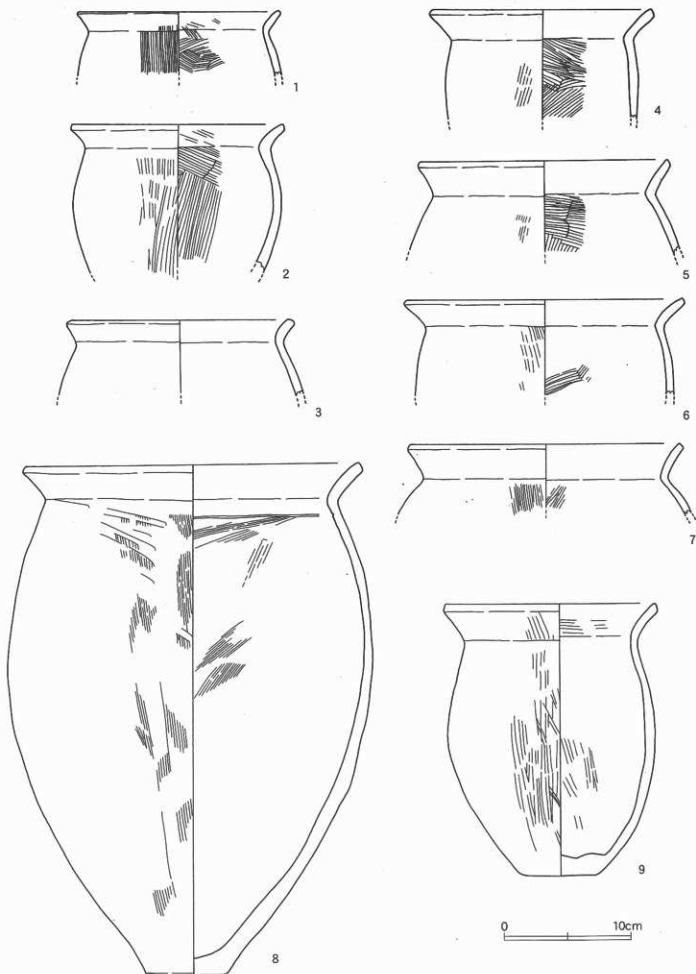
Ⅲ 出土遺物

竖穴式住居出土遺物 [第13～18・20図 PL10～12]

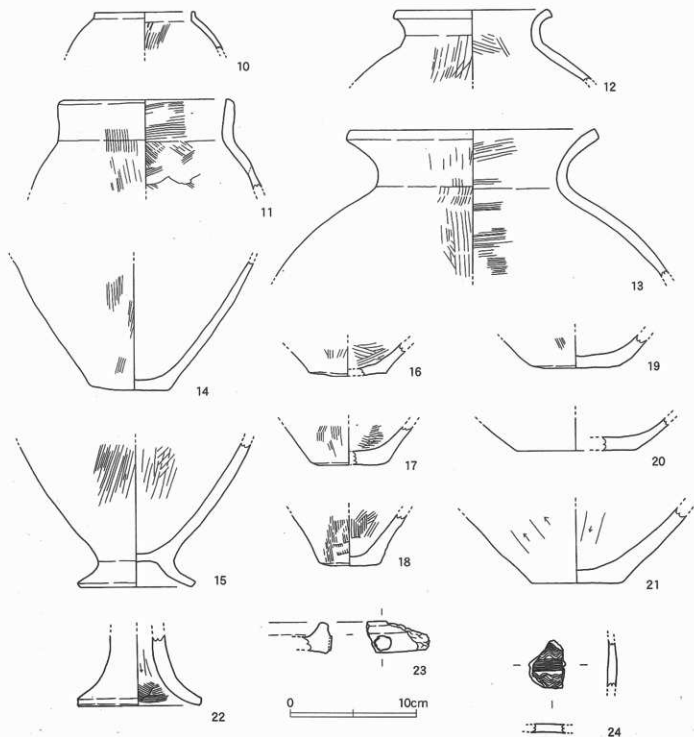
土器

1～24はSB-01上層出土土器で、1～9は甕形土器。1～3は丸みを帯びつつ外反するタイプで、4～7は直線的に若干長く外反し口唇部は稜線が明確となる。8は後者に該当し、上層出土土器の指標となる。底部外面から12cmより上位にはびっしり黒色の煤が付着しており、土器の使用状況が復元出来る。

10～13は壺形土器で、10・11は直口壺、12は口縁部が短く強く外反する。14～21は甕又は壺



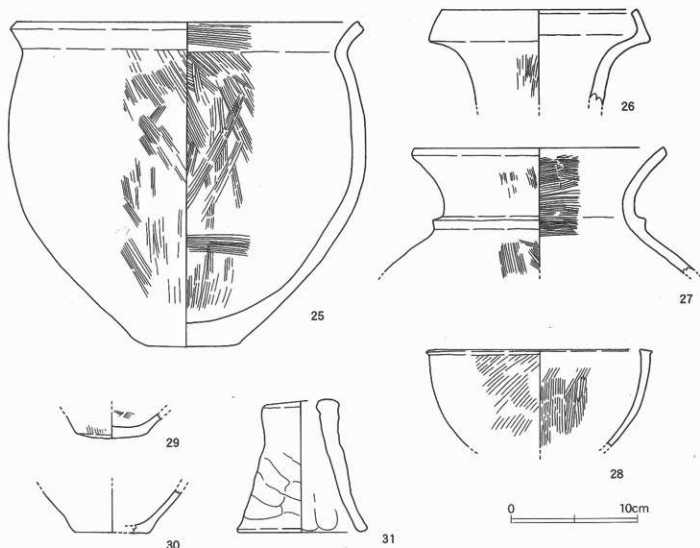
第13图 SB-01上層出土土器 実測図1 [1/3]



第14図 SB-01上層出土土器 実測図2 [1/3]

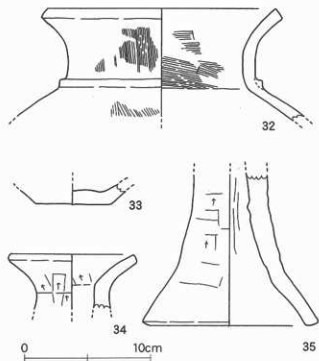
形土器の底部破片。16の底部にはヘラ削りによりレンズ状底部を強く意識している。19は体部と底部の境が不明瞭になっており、丸底化への伏線が感じられる。22は高坏の脚部破片。23は二重口縁壺の口縁部破片で、外面に直径1.4cmの円形浮文が張り付けられている。24は甕形土器の胴部破片と思われ、幅約9mmの原体による横方向の条線が入り、その上下に波状文が施されている。

25～31はSB-01下層出土土器で、25・28は鉢形土器で、25は非常に安定感がある。28は無頸の小型鉢。26・27は甕形土器で、26は頸部の短い複合口縁壺の口縁部破片である。29・30は小型の甕形土器の底部破片で、29の底部外面の調整は不定方向のハケが施される。31は支脚で、ほぼ完存。右下方向への深い指ナデが施される。



第15図 SB-01下層出土土器 実測図 [1/3]

32～35はSB-02出土土器で、32は壺形土器。33は小型の甕形土器底部破片。34・35は器台の口縁部、及び、脚部破片。

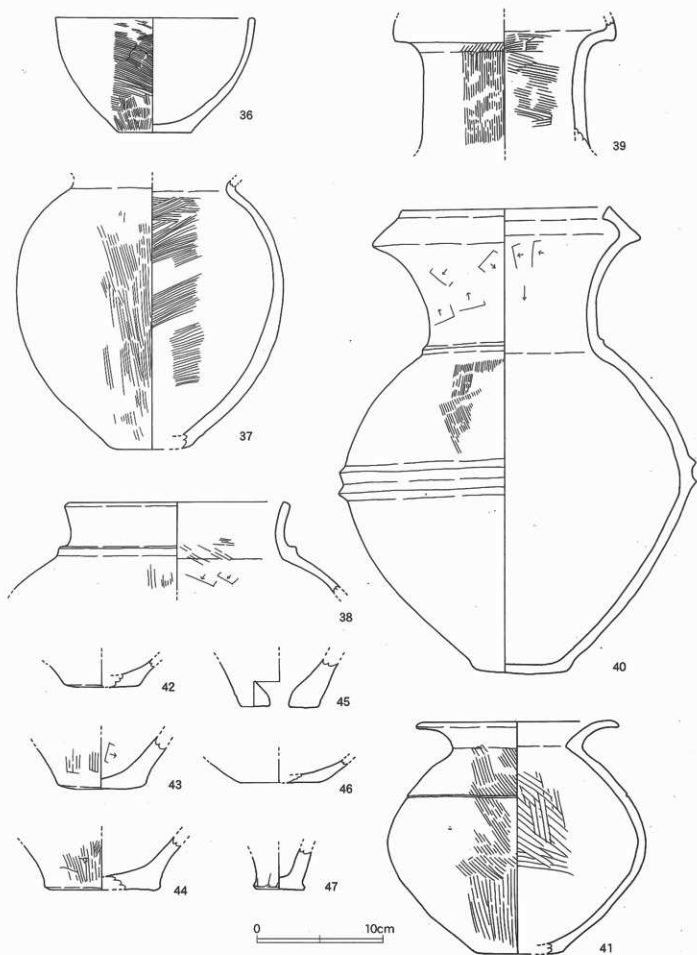


第16図 SB-02出土土器 実測図 [1/3]

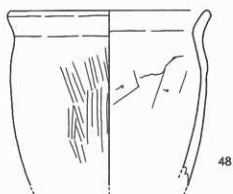
36～47はSB-03出土土器で、36は小型の無頸鉢形土器。37～41は甕形土器で、39・40は複合口縁壺。39の頸部は直線的に、やや長く上方に延びる。41は口縁部が極端な程外方に屈曲し、器高も低い。胴部最大径は中央にあり、断面は算盤形に近い。42～44・46は甕又は甕形土器の底部破片。45は甕形土器の底部破片。47は甕形土器を模したミニチュア土器で、底部付近の破片である。

48・49はSB-05出土土器で、48は小型甕形土器の口縁部～胴部破片で、口縁部は短く上方へ延びる。49は甕又は甕形土器の底部破片で、底部と体部の境が不明瞭になりつつある。

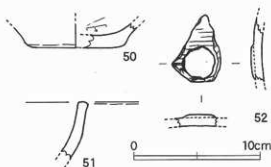
608・609はSB-37出土土器で、甕形、又は甕形土器の底部である。



第17图 SB-03出土土器 实测图 [1/3]



48



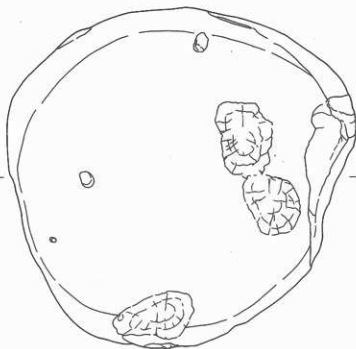
第19図 SK-03 出土土器 実測図
[1/3]



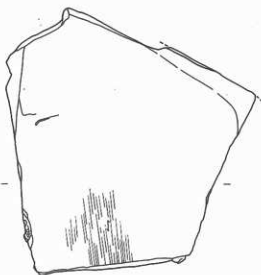
49



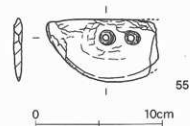
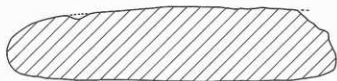
第18図 SB-05 出土土器 実測図
[1/3]



53



54



55

第20図 SB-01・03 出土石製品 実測図 [1/3]

石器

53～55はSB-01・03出土石製品で、53はSB-01出土の台石。表裏面ともに平滑であるが、砥石としての利用は認められない。54は雲母片岩製の砥石で、使用痕が明瞭である。砥面の一部や側面の周囲に鉄錆の付着が認められ、使用痕の状況から鉄器・石器兼用の砥石であった事が考えられる。55は雲母片岩製の石包丁で、表面は非常に平滑である。紐通し穴が裏表とも右方向に傾斜しており、突孔時の癖が見受けられる。

土壌出土遺物

土器 [第19図]

50～52はSK-03出土土器で、50は甕形、又は壺形土器の底部破片。51は鉢形土器の口縁部破片。52は壺形土器の胴部破片と思われ、円形浮文が張付けられている。

V まとめ

今回の調査により、今日まで不明瞭であった岩崎遺跡群の内容の一端が判明した事は大きな成果でありました。大正時代に中山平次郎氏により発見された弥生時代中期の堅穴遺構から大量の炭化米が出土し、それまで北部九州でも支界灘沿岸部に集中していると考えられていた弥生時代の稲作文化が筑後地方にも伝播・存在していた事実が証明され、大変大きな反響を得た事は周知のところであります。

しかしその後、岩崎遺跡群において本格的な学術調査が行われることはなく、ごく近年までは約2km南西に所在し、亀ノ甲遺跡を中心とした室岡遺跡群に調査や感心事が集中していました。

本調査の目的は、開発による埋蔵文化財の滅失を記録保存という形で保存し、後世の人々に残し伝える事が大きな目標として挙げられますが、もう一つは岩崎遺跡群の詳細を一部でも明らかにする事でした。遺跡群がどの程度の範囲にわたって広がりをもっているかは、現在の地表面に落ちている土器などの遺物を探取し分布状況を調べる事で分かるのですが、どの時代の遺構や遺物がどれくらい存在しているかは、地下を掘っての調査、いわゆる発掘調査によらねば分かりません。

今回の北原遺跡の発掘調査では、弥生時代の後期後半頃から末頃（約1800年から1750年前程）に営まれた集落跡が発見され、5軒の堅穴式住居、1棟の掘立柱建物、3基の土壇が検出されました。この発見により岩崎遺跡群は前述した弥生時代中期だけの存在ではなく、古墳時代直前の時期まで集落が形成されていた事が確実になりました。

また、今回の調査地点は、これまで想定されていた岩崎遺跡群の北限に近いところでありましたが、住居跡の密集度から見ると、更に北に向かい集落群が延長している事が想定出来るようになり、岩崎遺跡群が予想以上に大きな広がりを持っている事が分かりました。

今後も岩崎・吉田地区においては発掘調査等による精査を続けてゆき、時代的にもつながりが強いと思われる室岡遺跡群との関わりを調べながら、この地域の弥生時代像を鮮明にしたいと考えています。

北原遺跡 出土土器観察表

(No.1)

押図	掲載 番号	実測 番号	出土 遺構	種類	器種	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	調整(外面、内面)	色調、胎土、焼成	備 考
第13図	1	106	SB-01 上層	弥生式 土器	甕	15.6	—	—	(外)タテハケ (内)ハケ	暗黄茶色、精良、良好	
"	2	112	"	"	甕	16.8	—	—	(外)タテハケ (内)ヨコ・斜ハケ	暗茶灰褐、精良、良好	黒斑有
"	3	105	"	"	甕	16.8	—	—	(外) (内)ナデ	暗灰茶褐、石英粒多、良	煤付着
"	4	113	"	"	甕	17.6	—	—	(外)タテハケ後ナデ (内)荒ハケ	黒茶、微量石英、良好	煤付着
"	5	117	"	"	甕	19.8	—	—	(外)タテハケ後ナデ (内)荒ハケ	暗茶色、微量の石英・長 石粒、良好	
"	6	114	"	"	甕	22.0	—	—	(外)タテハケ (内)ハケ	暗黄茶褐、片岩粒含、良 好	煤付着
"	7	115	"	"	甕	21.4	—	—	(外)タテハケ (内)斜ハケ	淡茶灰褐、石英粒多、良好	黒斑有
"	8	1	SB-01	"	甕	26.3	6.0	40.2	(外)左上タキ後ナデ (内)斜ハケ後ナデ	暗茶褐、石英・片岩小粒 子多、良好	胴部上半に多量の煤付着
"	9	101	SB-01 上層	"	甕	16.7	5.5	16.4	(外)タテハケ (内)タテハケ後ナデ	淡黄茶、精良、良好	外底面ナデ
第14図	10	104	"	"	無頸壺	8.0	—	—	(外)ナデ (内)ハケ	明赤褐、精良、良好	
"	11	118	"	"	直口壺	12.8	—	—	(外)ハケ後ナデ (内)ハケ後ナデ	暗茶、片岩粒多、良好	
"	12	116	"	"	壺	11.8	—	—	(外)荒ハケ (内)ハケ後ナデ	淡茶褐、精良、良好	
"	13	120	"	"	壺	19.4	—	—	(外)タテハケ (内)ヨコハケ	淡黒茶、片岩粒多、良好	黒斑有
"	14	111	"	"	甕底	—	6.3	—	(外)タテハケ (内) —	暗茶、石英、片岩粒子多、 良好	
"	15	121	"	"	甕底	—	9.0	—	(外)タテハケ後ナデ (内)ハケ後ナデ	暗茶、精良、良好	脚付ガメ
"	16	10	SB-01 最上層	"	甕底	—	6.0	—	(外)ナデ? (内)ハケ	淡黄茶、精良、やや不良	
"	17	9	"	"	甕底	—	6.0	—	(外)ナデ (内)ハケ指押さえ	淡黄茶、精良、良	
"	18	14	SB-01 上層	"	甕底	—	5.0	—	(外)ナデ (内)ハケ指押さえ	淡茶灰色、石英粒多、良	
"	19	108	"	"	壺底	—	4.8	—	(外)ナデ? (内)指押さえ	暗茶、精良、良	
"	20	11	SB-01 最上層	"	壺底	—	9.4	—	(外)ナデ (内)ナデ	暗茶灰、石英粒多、良	
"	21	107	SB-01 上層	"	壺底	—	7.2	—	(外)タテハケ後ナデ (内)タテハケ後ナデ	暗黄茶色、石英粒多、良	
"	22	13	"	"	高杯脚	—	10	—	(外) — (内)ハケ・指ナデ	黄茶褐、精良、良好	
"	23	8	SB-01 最上層	"	二重口 縁壺	—	—	—	(外)ヨコナデ (内)ナデ	淡黄灰、長石含む、良	円形浮文
"	24	119	SB-01 上層	"	甕?	—	—	—	(外)波状文 (内)	淡黄褐、砂粒多、良	
第15図	25	126	SB-01	"	甕	27.2	8.0	25.6	(外)タテハケ (内)ハケ	淡黄茶褐、精良、良好	
"	26	110	"	"	複合口 縁壺	15.6	—	—	(外)タテハケ (内)ヨコハケ後ナデ	淡黄茶、石英粒多、良	
"	27	109	"	"	壺	20	—	—	(外)タテハケ (内)ヨコハケ・ナデ	淡黄茶褐、石英・片岩粒 多、良好	
"	28	4	SB-01 下層	"	鉢	18	—	—	(外)タテハケ (内)斜ハケ	淡褐、石英・片岩粒多、良好	
"	29	5	"	"	甕底	—	5.5	—	(外)底部ハケ (内)円形状のハケ	淡黄茶、石英粒多、良好	黒斑有
"	30	15	SB-01	"	甕底	—	6.0	—	(外)ナデ (内)ナデ	黄褐、石英粒多、良好	
"	31	16	"	"	支脚	6.0	10.4	10.4	(外)深い指ナデ (内)縦の指ナデ	暗黄褐、石英粒多、良好	
第16図	32	18	SB-02	"	壺	18	—	—	(外)ハケ (内)ハケ後ナデ	淡黄茶、石英・長石多、良	口縁部に縦糸線入る
"	33	20	"	"	壺底?	—	6.0	—	(外)ナデ (内)ナデ	淡褐、長石含、良好	

北原遺跡 出土土器観察表

(No.2)

押図	掲載 番号	実測 番号	出土 遺構	種類	器種	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	調整(外面、内面)	色調、胎土、焼成	備 考
第16図	34	19	SB-02	弥生式 土器	器台	10	—	—	(外)ハラナデ (内)ナデ	暗赤褐、石英細砂粒多、 良好	
"	35	22	"	"	"		14		(外)指押さえ・ナデ (内)シボリ痕・指押さえ	淡黄灰、精良、やや不良	粘土積み上げ荒い
第17図	36	103	SB-03	"	鉢	15.6	5.7	9.1	(外)ヨコハケ後タテハケ (内)ハケ後ナデ	茶褐、石英粒少量含、良好	
"	37	102	"	"	壺	—	5.0	—	(外)タテハケ (内)斜ハケ	暗黄茶褐、精良、良好	
"	38	123	"	"	"	17	—	—	(外)タテハケ (内)ハケ後ナデ	淡茶褐、石英砂粒含、良好	
"	39	31	"	"	複合口 縁壺	—	—	—	(外)タテハケ (内)ヨコハケ	黄褐色、長石含、良好	
"	40	2	"	"	複合口 縁壺	16.6	7.7	36.4	(外)ハケ後ナデ (内)ナデ	明茶褐、石英・片岩粒子 多、良好	口唇部つまみ上げ
"	41	3	"	"	壺	16.4	6.9	18.3	(外)ハケ後ナデ (内)斜ハケ	暗赤褐色、石英砂粒多い、 良好	
"	42	25	"	"	甕底	—	6.0	—	(外) — (内)ナデ	淡黄灰、精良、良	黒斑
"	43	28	"	"	"	—	7.0	—	(外)ハケ後ナデ (内)荒ハケ後ナデ	暗赤褐、石英粒多く含、 良好	線付着
"	44	29	"	"	"	—	9.0	—	(外)タテハケ (内)ナデ	茶褐、石英・片岩粒多い、 良	
"	45	27	"	"	甕	—	6.0	—	(外)ハケ後ナデ (内)指ナデ	淡茶褐、精良、良好	焼成前突孔
"	46	26	"	"	壺底	—	6.0	—	(外)ナデ (内)ナデ	淡黄茶、長石多い、良好	黒斑
"	47	38	"	"	ミニチ ュア壺	—	4.0	—	(外)ナデ (内)ナデ	暗黄褐、精良、良好	
第18図	48	125	SB-05	"	甕	15.6	—	—	(外)タテハケ (内)ハケ後ナデ	黒茶褐色、石英砂粒含、 良好	
"	49	124	"	"	壺底	—	7.7	—	(外)タテハケ (内)ハケ後ナデ	淡黄茶色、石英粒多、や や不良	
第19図	50	34	SK-03	"	甕底	—	7.8	—	(外) — (内)ナデ	淡黒茶褐、石英粒多、良	線付着
"	51	35	"	"	鉢	—	—	—	(外)斜ハケ (内)ハケ	淡黒灰色、精良、良好	
"	52	37	"	"	甕?	—	—	—	(外)ハケ (内)ハケ	淡褐色、石英・片岩粒多 い、良好	円形浮文

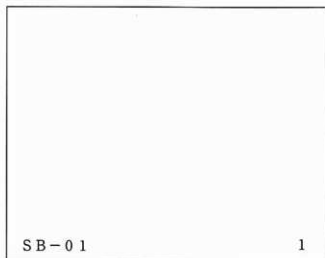
北原遺跡 出土土器観察表

押図	掲載 番号	実測 番号	出土 遺構	器種	材質	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	質量 (g)	備 考
第20図	53	201	SB-01	台石?	—	26.8	27.6	5.9	—	
"	54	205	SB-03 屋内土境	砥石	片岩	21.2	19.8	1.5	1,300	
"	55	204	SB-01 上層	石包丁	"	5.0	8.8+&	0.7	40.5	

PLATES

凡例

出土遺物に関する記載は、以下の要領となっている。



(出土遺構番号)

(図掲載番号)



北原遺跡 調査前風景
(南東から)



北原遺跡 表土剥ぎ後風景
(南東から)



北原遺跡 遺構面検出風景
(南南東から)

北原遺跡 調査区全景
(南東から)



北原遺跡 調査区北西側
(南東から)

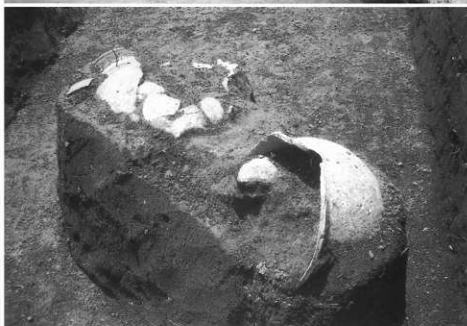


北原遺跡 SB-03
調査風景 (南東から)





SB-01・02全景
(北から)



SB-01土器出土状況
(北から)



SB-01土層断面状況
(南東から)

SB-01 硬化面状況
(南南東から)



SB-01 北側貯蔵穴
(北東から)



SB-01 南側貯蔵穴
(西から)





SB-01 中央炉断面状況
(東から)



SB-01・02
屋内土壌状況(北東から)
(手前: 02、奥01)



SB-01・02
屋内土壌状況(南東から)
(右: 02、左01)

SB-02 Aピット

断面状況 (南から)



SB-01・02

切り合い状況 (北から)



SB-02 切り合い状況

(東から)



PL 7



S B - 0 1 完掘状況
(北から)



S B - 0 3 完掘状況
(南から)



S B - 0 4 完掘状況
(西から)

SB-05 完掘状況
(北から)



SB-06 完掘状況
(南東から)



SK-01 完掘状況
(北東から)





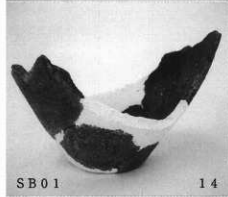
SK-01 完掘状況
(北から)

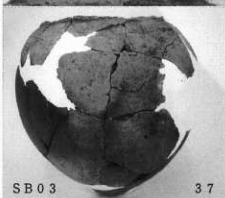
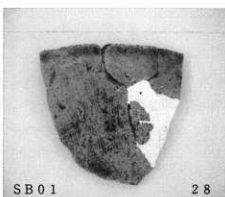


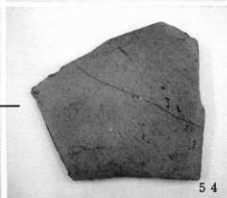
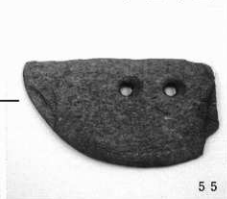
SK-02 完掘状況
(西から)



SK-03 完掘状況
(南から)







報告書抄録

ふりがな	きたはらいせき						
書名	北原遺跡						
副書名	福岡県八女市岩崎字北原所在の調査報告書						
巻次							
シリーズ名	八女市文化財調査報告書						
シリーズ番号	第 83 集						
編著者名	大塚恵治						
編集機関	八女市教育委員会						
所在地	834-8585 福岡県八女市本町647 TEL. 0943-23-1982						
発行年月日	西暦 2008年3月31日						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村：遺跡番号	北緯 ° ' "	東経 ° ' "	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
きたはら 北原遺跡	ふくおかけん 福岡県 やめしいわきま きたはら 八女市岩崎字北原	402109	33°13'34"	130°32'37"	2007 04 25 ～2007 05 31	約100m ²	電波基地 局建設
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物	特記事項	
北原遺跡	集落跡	弥生時代	竪穴式住居 堀立柱建物 土壇		弥生式土器 石器		

北原遺跡

八女市文化財調査報告書
第83集

平成20年3月31日

発行 八女市教育委員会
八女市本町647
印刷 (資) 東兄弟印刷所
八女市祈祷院563